

柔道国際交流事業への参加意識についての調査報告

中西英敏*¹・佐藤宣践*¹・橋本敏明*¹・白瀬英春*¹
山下泰裕*¹・恩田哲也*²・光本健次*³

The Study on the Sense of Participation to the International Judo Exchange Program

by

Hidetoshi NAKANISHI, Nobuyuki SATO, Toshiaki HASHIMOTO, Hideharu SHIRASE,
Yasushiro YAMASHITA, Tetuya ONDA and Kenji MITSUMOTO

Abstract

Tokai University Educational System has been held Matsumae International Judo Championships in Denmark and Austria in past years.

We have conducted questioner on the participants to the above competitions in year of 2003 and 2004. Our goal of this conduct is that to study on the tendency toward the following matters;

- 1) Has this program been achieved an effect on the goal of International sports exchange program?
- 2) Is this program has been useful for the improvement of participant's competitive ability?

We received effective 50 respondents in 2003 and 73 respondents in 2004, totally we have received effective 123 respondents.

As the analysis of these results, 76.4% of respondents had good impression and 95.1% of respondents had impression that participation to the above championships will be useful for their future life. Also 75.4% of respondents had a good impression to the improvement of participant's competitive ability and 39.5% of respondents had an impression of the necessity of International exchange.

We believe from this result that this International sports exchange program has been successfully established along with the goal and it has been useful for the improvement of participant's competitive ability. Especially this program mean to Japanese people very important as a work-study program.

We will proceed more with this program and we would like to develop Educational program through International exchange for the future.

* 1 体育学部武道学科

* 2 体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

* 3 体育学部体育学科

I はじめに

学校法人東海大学がデンマークに設置しているヨーロッパ学術センター（コペンハーゲン）を窓口として「松前コペンハーゲンカップ」と称する国際柔道大会を初めて開催したのは1988年2月20日であった。以来、2003年2月までの15年間に計8回の大会が開かれた。そして、この事業は他地域に広がりを見せ、2004年2月にはオーストリアにある松前武道センター（ウィーン）を会場として開催されるに至った（以下、大会名を松前カップと称す）。なぜ学校法人東海大学が海外で柔道大会を開催するのだろうか。その理由としては、当然ながら国際的活動、及びスポーツ活動の推進に熱心な学園の方針を挙げることができる^{※1)}。特に柔道に関しては、学園創立者の松前重義が国際柔道連盟会長（1979年12月～1987年11月）であったことの影響が大きいといえる。東海大学柔道部作成の第1回大会報告書（1988年4月）には、「この企画は昨年夏環太平洋学長研究所長会議^{※2)}で合意された『大学間のスポーツ交流は、国境を越えた友好親善、新しい世代の精神的連帯に大きく寄与するものである』との精神に則るもの」と記されている。この指摘は、松前カップの開催理念、及び目的を理解する上で重要であろう。

われわれは、松前カップに当初から関わり、スポーツ国際交流の精神を生かすように尽力してきた。また、同時に参加学生の競技力向上を図る貴重な場として位置づけ、実技能力向上に務めてきた。その成果については、参加学生の感想文や各種大会での成績からおおむね良いと認識しているが科学的に検証したものではない。そこで、松前カップがスポーツ国際交流の趣旨に沿った成果を上げているのかどうか、競技力向上に役立っているのかどうかなどについて点検するために2003年と2004年の参加者を対象にアンケート調査を行った。同様の調査は、松前カップとは別にデンマークで1993年から毎年夏季に開催している「柔道サマースクール」の参加者を対象に実施したことがある³⁾。しかし、柔道分野の先行研究は少ない。

本報告は、アンケート調査の集計、及び行事報告書等を分析したものである。その結果、先に述

べた点検項目に関していくつかの知見が得られたので報告するものである。

II 方法

1. 調査目的

松前カップ（以下、競技会と称す）、及び大会後の柔道トレーニングキャンプ（以下、キャンプと称し、2部門を合わせて本事業と称す）への参加者を対象に実施したアンケート調査の目的は、次の項目に関する傾向を把握することにある。

1) 参加者の特色について、2) 本事業の印象と参加意識について、3) 東海大学への認識について、4) 柔道を始めた理由と柔道理念への認識について。

調査結果の分析、考察は、次の観点から行った。

1) 本事業がスポーツ国際交流の趣旨に沿った効果を上げているかどうか、2) 本事業が参加者の競技力向上に役立っているかどうか。

2. 調査方法

2003年2月と2004年2月に下記の場所で開催された本事業の期間中に質問紙法（英語、及び日本語）による調査を実施した。キャンプでの練習後に質問紙を配布して回答を依頼し、その場で回収した。質問紙は、多肢選択型式と自由記述型式からなる。

- 1) 第8回松前カップ国際柔道大会・国際トレーニングキャンプ（主催：デンマーク柔道連盟）、2003年2月22日から26日まで、デンマーク・ヒレロドの体育館を会場に開催。
- 2) 第1回松前カップウィーン国際柔道大会・国際トレーニングキャンプ（主催：オーストリア柔道連盟）、2004年2月21日から25日まで、オーストリア・ウィーンの松前武道センターを会場に開催。

開催地は異なっているが、競技方法（国際柔道連盟ルール）とトレーニングキャンプ内容は同様である。柔道キャンプの参加者は2003年が約80人、2004年が約100人である。そのうち有効標本数（回収率）は、合計で123（68.3%）である。集計は、単純集計及びクロス集計を行った。また、本事業に関する東海大学柔道部の「海外研修報告

書」(2002年度・2003年度)を参考資料とした。

3. 調査内容

調査項目は、性別、年齢、国籍、段級位などの基礎的項目、大会運営及びキャンプに関する項目、東海大学に関する項目、柔道に関する項目など計19項目からなる(巻末に添付)。デンマークでの調査項目には参加回数を尋ねる質問があるが本報告には含まない。

III 結果と考察

1. 参加者(調査対象者)の特色について

回答者は、「日本人(J)」と「日本人以外(以下、外国人と称する)」に大別できる。「外国人(F)」の内訳を見ると、2003年はデンマーク人が6(30%)、2004年はオーストリア人が6(14%)であり、とくに開催国の人数が多いわけではない。国籍は、カナダ、フィンランド、クロアチア、ニュージーランドなど様々である^{※3)}。したがって一括して「外国人」に分類し「日本人」と比較する。日本人は、東海大学と国際武道大学の学生である。また、項目によって実施年別、性別の観点から比較する。

回答者数は、2003年が50(J30, F20)、2004年が73(J30, F43)の合計123である。日本人の割合が48.8%に対し外国人は51.2%で、ほぼ拮抗している。回答者数を実施年別に見ると2002年が40.7%で2003年が59.3%である。性別では、男性の61.8%に対して女性は38.2%と、男性の割合が高い。平均年齢(n=116)は、21.2歳(SD3.2)であり、最小は16歳(2004年)、最大は37歳(2003年)である。

段級位(n=123)については、「二段」の割合が最も高く30.1%で、次に「三段」の26.0%、「初段」の20.3%、「一級」の14.6%である。これら四つで91.0%を占める。日本人は、全員が二段以上で、最も高い段位は五段である(J1, 2004年)。「なし」は外国人である(F2, 2003年)。段級位は日本人の方が高い傾向にある。

柔道経験年数(n=123)については、「11年以上」と答えた者の割合が最も高く63.4%(J71.6%, F55.6%)であった。続いて、「6～10

年」の30.9%(J26.7%, F34.9%)、「1～5年」の5.7%(J1.7%, F9.5%)である。「1年未満」の回答者はいなかった。6年以上の経験者の割合が94.3%に達している。

立場(n=123)については、「競技者」と答えた者の割合が95.9%(J100.0%, F95.9%)と断然高く、続いて「コーチ」の3.3%、「愛好者」の2.3%である。コーチと答えた4人も全て競技者を兼ねており、愛好者と答えた1人は柔道キャンプのみの参加である。

以上のことから参加者(調査対象者)の特色として、「大半が21歳前後の競技者であり、二段前後の有段者で6年以上の柔道経験を持っている者の割合が高い」ことを指摘できる。

2. 本事業に対する印象と参加意識について

本事業は、競技会とキャンプの2部門で構成されている。回答者(n=123)の86.2%が「競技会とキャンプの双方」に参加している。「競技会のみ」と答えた者(2003年)は6.5%(J8)であり、「キャンプのみ」も同じく6.5%(J2, F6)である。

まず競技会について、大会運営に関する全般的な印象だが、「よい」と答えた者の割合は、全体で76.4%(J78.3%, F74.6%)であった(図1)。これを開催年別に見ると、2003年が70.0%、2004年は80.8%で、2004年の方が高い割合を示している。「わからない」は全体で17.1%だが、2003年は外国人の割合が高い(30%)。「悪い」は5.7%で全て男性(J4, F3)である。「印象」に

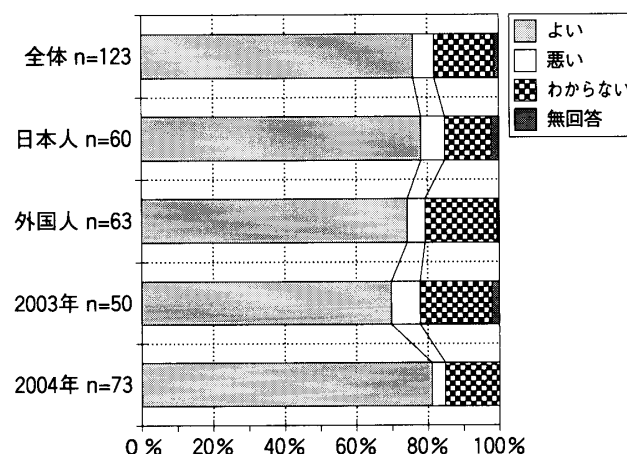


図1 大会運営の全体的印象について

については、その判断基準が問われるが、ここではあくまでも日本とヨーロッパにおける競技会運営の常識に委ねている。「よい」の割合をどのように受け止めるかについては比較する資料がないので何ともいえない。大まかに見るならば、4人に1人は「よい」印象を持たなかったわけだから、運営面で改善すべき点があるのかもしれない。

本事業の競技会には、世界及び大陸連盟レベルの競技会と違って多くの日本人選手が出場できる。その適切な割合を知ること運営上、大切なことだろう。そこで、日本人の参加について質問した。第一に「日本人の参加が大会を盛り上げるかどうか」についてだが、全体 (n=123) で92.7%が「盛り上げる」と回答している。「盛り上げない」と答えた者の割合は2.4%、「わからない」は4.9%であった。外国人は、63人中62人が「盛り上げる」と答えており、日本人の参加を肯定的に受け止めていることがうかがえる。第二に「実際の参加人数に対する受け止め方」についてはどうだろうか。競技会への日本人参加の割合は、階級で差があるものの全体では2003年 (n=208) が19.7%、2004年 (n=214) は15.9%である。「参加人数は多いと思うか」の質問に、「思う」と答えた者の割合が全体 (n=123) で33.3% (J16.7%, F49.2%) であるのに対して「思わない」は48.0% (J56.7%, F39.7%)、「わからない」は18.7% (J26.6%, F11.1%) である。このことから、外国人の半数が日本人の参加人数が多いと思っていることが分かる。競技の公平性という観点からこの点には留意する必要があるように思われる。

次にキャンプの内容について、2004年を例に時間配分順 (合計810分) に列記すると次のようになる。

①「試合形式の練習」240分、②「乱取 (立技)」と「技術講習」が各180分、③「講義」120分、④「乱取 (寝技)」60分、⑤「形の演技」30分。

柔道講習会の内容は、一般的に②「乱取 (立技、及び寝技)」と「技術講習」が主体である。われわれは、これらに①「試合形式の練習」と③「講義」、それに⑤「形の演技」を加えた。前者の従前内容を「旧内容」、後者のそれを「新内容」に

表1 柔道キャンプでよいと思った内容について (複数回答)

区分	内容	旧内容			新内容		
		乱取 (立技)	乱取 (寝技)	技術講習	講義	試合形式練習	形の演技
全体	n 122	% 59.8	% 18.0	% 64.8	% 13.1	% 23.0	% 5.7
日本人	60	28.3	5.0	83.3	23.3	45.0	11.7
外国人	62	90.3	30.6	46.8	3.2	1.6	0

区分して検討する。

これらの内容について、「よい」と思ったことを2つ以内で選んでもらった (複数回答 M. A. n=122)。その結果は表1に示すとおりである。これを見ると、日本人と外国人の認識に違いがあることが分かる。すなわち全体では「技術講習」の64.8%、及び「乱取 (立技)」の59.8%が高い割合を示している。しかし、日本人 (n=60) は「試合形式の練習」(45.0%) の割合が高い。外国人 (n=62) を見ると「乱取 (立技)」の割合は90.3%と高いが、「講義」や「試合形式の練習」「形の演技」の割合は極端に低い。上記の「旧内容」と「新内容」で比較すると、外国人は「旧内容」が97.2%で「新内容」は僅かに2.8%である。「新内容」は、われわれが日本人学生への教育面と柔道への全般的理解を深める面から意欲的に導入したわけだが、その趣旨は十分に浸透していないように見受けられる。

本事業への参加経験が今後の成長に役立つかどうかについては、「思う」と答えた者の割合が全体で95.1%であり、次に「わからない」の4.9% (全て女性, J3, F3)、「思わない」は皆無である。これは大変好ましい傾向といえる。われわれが1988年に発表した先行研究²⁾においても、デンマークで実施した柔道講習会への参加経験が今後の成長に役立つと答えた者の割合 (n=206) は89.8%と高率であったことから、この種の事業が肯定的に受け止められていることがうかがえる。

「思う」と答えた者 (n=114) に対して、その内容を7項目の中から2つ以内で選んでもらった (M. A.)。その結果、全体では「競技力向上」が75.4% (J77.4%, F73.8%) と最も高い割合を

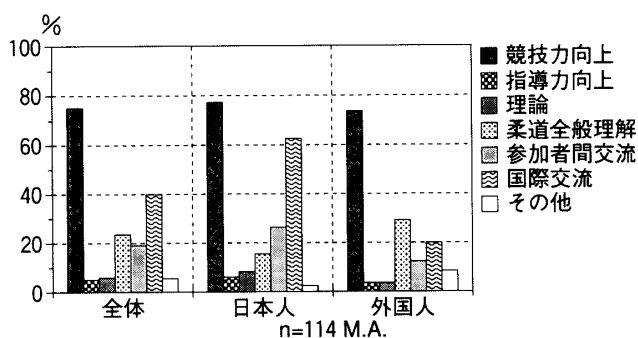


図2 成長に役立つと思う内容について (複数回答)

示し、続いて「国際交流の大切さ」の39.5% (J62.3%, F19.7%), 「柔道全般の理解」の22.8% (J15.1%, F29.5%) となっている (図2)。実施年別に見ても両年の傾向は同じで、性別の傾向もほぼ同じである。しかしながら、日本人と外国人の傾向は少し違う。日本人は、「国際交流の大切さ」と「参加者との交流」と答えた者の割合が高く人的交流を重視している。これに対して外国人は、「柔道全般の理解」と答えた者の割合が高い。これらの傾向から、本事業がスポーツ国際交流の趣旨を理解し、また競技力向上を図る上で役立っていることがうかがえる。

3. 東海大学に対する認識について

本事業を推進している東海大学を知っているかどうかを聞いたところ (n=123), 「知っている」と答えた者の割合が78.0% (J93.3%, F63.3%) で、「知らない」は17.1% (F33.3%) であった。「わからない」は1.6%, 「無回答」3.3%である。

「知っている」と答えた者 (n=96) に、どのような内容で知ったのかを7項目の中から2つ以内で選んでもらった (M. A.). 日本人は大半が在学生であるから外して外国人 (n=40) の傾向を見ると、「友人, 知人」の割合が最も高く57.5%であり、続いて「インターネット」の20.0%, 「日本の東海大学に行った」と「その他」の17.5%である。本やパンフレットなどの出版物の影響は極めて低い。こうした傾向は、親しい人間からの情報が重要であることを示唆するものだろう。

東海大学の創立者である松前重義は国際柔道連盟の会長であったが、そのことを知っているかど

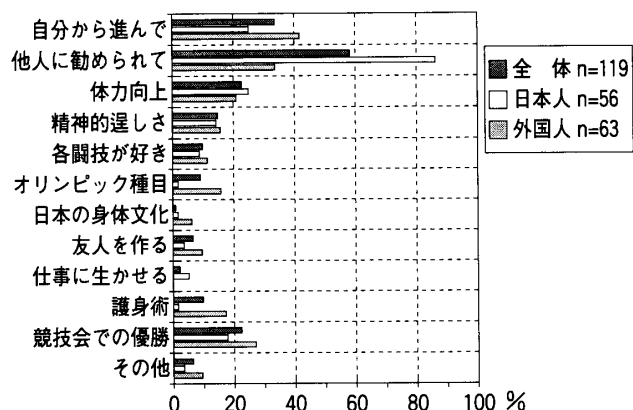


図3 柔道を始めた理由について (複数回答)

うかを聞いたところ (n=123), 全体では「知っている」が57.7% (J88.3%, F28.6%) であり、「知らない」の36.6% (J5.0%, F66.6%) を上回った。外国人は「知らない」と答えた者の方が多い。

4. 柔道を始めた理由と柔道理念の認識について

柔道を始めた理由について12項目から3つ以内で選んでもらった (M. A. n=119)。その結果は図3に示すとおりである。これを見ると、競技者としての特色がよくあらわれており、また日本人と外国人との間で違いの目立つ項目を指摘できる。すなわち全体では「他人に進められて」が58.0% (J85.7%, F33.3%) と最も高い割合で、次に「自分から進んで」の33.6% (J25.0%, F41.3%), 「体力向上」と「競技会での優勝」がそれぞれ22.7%と続く。日本人と外国人の違いは、「自分から進んで始める」割合が高い外国人に対して、日本人は「他人に進められて始める」割合が高い。また「オリンピック競技の種目だから」 (J1.8%, F15.9%) や「護身術として」 (J1.8%, F17.5%) などに違いがあらわれている。

日本柔道は、教育活動やボランティア活動などの社会活動を重視し、人々の共存共栄を希求する理念を有している。このことを知っているかどうかを聞いたところ (n=123), 全体では「知っている」が66.6% (J68.3%, F65.1%) であり、「知らない」は25.2% (J25.0%, F25.4%), 「わからない」4.9% (F9.5%), 「無回答」3.3%

(J6.7%)である。4人に1人は「知らない」という傾向を示している。

5. 参加者の意見・感想について

自由記述型式で意見・感想を求めたところ、全体で40(2003年18, 2004年22)の回答があった(J19, F21)。また、2003年は別にデンマークの役員2名から回答を得た。

これらのうち、大半は「よい経験になった(J12, F2)」, 「キャンプがよかった(F9)」, 「今後の成長にプラスになる(J6)」などの肯定的意見であった。また、本事業への要望といえる意見で多かったのは、2004年のキャンプ日程に関して「連絡が悪い(F4)」というものだった。その他、外国人からの意見だが、宿泊に関して「ホテルの食費などが高すぎる」, 競技会運営に関して「初戦で同じ国の選手と戦った」という組み合わせの問題、また審判員の技術についてきびしい意見が記されていた。

デンマークの役員の意見は、松前カップがデンマークにおける柔道の普及と発展に寄与しているという趣旨である。また日本人の研修報告書には合計54人の感想文が載っている。その内容を「国際交流(異文化理解を含む)」, 「競技力向上」, 「日常生活」の三つの面に分けて分析したところ、全てが肯定的意見で否定的意見は皆無だった。その中では「競技力向上」の割合が多くて88.9%である。続いて「国際交流の大切さを認識した」という内容で33.3%, 「日常生活に経験が生かせる」という内容が16.7%である。日本人には海外旅行や国際大会出場を初めて体験する者も多く、本事業の教育効果は大きいといえるだろう。

IV まとめ

デンマークとオーストリアで実施している柔道国際交流事業への参加意識について、参加者へのアンケート調査を実施し、その集計結果から本事業への参加意識の傾向を把握することを試みた。且つ、スポーツ国際交流の趣旨に沿った効果を上げているかどうか、競技力向上に役立っているかどうかの観点から考察した。その結果、次のようなことが浮き彫りにされた。

本事業への参加者(n=123)は、日本人、外国人ともに大半が21歳前後の若い競技者である。大会運営については4人に3人が「よい」印象を持っている(76.4%)。日本人の参加については肯定的に受け止められているが、その参加人数に関して「多いと思う」と答えた者の割合が33.3%を示しており、競技の公平性から見て留意すべき点だろう。参加経験が今後の成長に役立つかどうかについては、「思う」との回答が95.1%であり、その内容を見ると第1位が「競技力向上」(75.4%)、続いて「国際交流の大切さ」(39.5%)、 「柔道全般の理解」(22.8%)である。日本人に「国際交流の大切さ」を挙げた者が多い。この傾向は好ましいといえる。

キャンプ内容に関しては、「技術講習」や「乱取(立技)」に強い関心を示す外国人に対して「試合形式の練習」などに関心を示す日本人との間で違いが見られる。両者の違いは、柔道を始めた理由にもあらわれており、「他人に進められて」の割合が高い日本人に対して外国人は「自分から進んで」の割合が高い。

東海大学への認識については、東海大学を知っている者の割合は78.0%であり、友人、知人からの情報によると答えた者の割合が最も高い(57.5%)。

われわれは、今回の調査結果による参加意識の傾向から本事業がスポーツ国際交流の趣旨に沿って展開されており、競技力向上にも役立っていると考える。とくに日本人に関しては、体験学習として重要な意味を持っていると思われる。

東海大学はグローバルな視点を重視し、多様な国際的活動を展開している。社会のグローバル化は今後さらに進展すると思われるが、そうした中でスポーツ国際交流の役割もますます大きくなることが予想される。われわれは、学園の教育理念を踏まえ、大学の教育・研究に貢献するスポーツ国際交流を推進していきたいと考えている。

今後の課題としては、柔道国際交流事業の充実を図るために意識調査などの研究をさらに進め、事業内容と教育効果の関連をより明確にしたいと思う。また、学生教育の方法として事前・事後学習を含め体系化を図りたいと考えている。

注

- 1) 『東海大学五十年史・通史篇』（学校法人東海大学、1993）は、国際的活動の展開に関して次のように説明している。
「本学は、国際的視野をもつ人材の育成を目的として多様な国際教育・研究活動を展開してきた。本学の国際的活動は、前述したように七〇年代に基礎がつくられ、八〇年代に飛躍的な発展を遂げることになる。」（第三節 国際的活動の展開、p 658）
また、スポーツ活動については、「八〇年代に入り、体育会各部の活躍はますます盛んになり、野球、柔道といった本学の伝統的競技種目以外にバレーボール、サッカー、漕艇、剣道、居合道、ソフトボール等でも覇を競うほどの躍進ぶりを示している。」と記している（第五節 学生生活の充実、p 727）。さらに『五十年史・部局篇』のヨーロッパ学術センターの部には、「本学は、スポーツを通じての国際相互理解を推進してきたが、その活動の一環として、デンマーク柔道連盟の全面的な協力を得て、第一回松前杯コペンハーゲン柔道大会を二月二〇日、コペンハーゲンのグロンダールセンターで開いた。」との記述がある（p 649）。これらの文章から学園の方針がうかがえる。
- 2) 東海大学と米国タフツ大学の共同の呼びかけで、「アジア・環太平洋学長研究所長会議」が1987年8月に東京で開催された。テーマは、「核時代に

生きる教育者、研究者は今後何をなすべきか」で、18ヶ国・地域の56大学・研究所、73名の学長・研究所長が参加し「東京宣言」を採択した。この「東京宣言」で合意した内容の三番目が大学間のスポーツ交流に関するものであった。（上記五十年史・通史篇、p 692-694）

松前カップは、会議が終了して半年後に開催されたことになる。

- 3) デンマークにおける松前カップは北欧諸国を中心に開催されている。2003年の参加国は次のとおりである。

デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、アイスランド、ドイツ、イギリス、フランス、オーストリア、カナダ、日本

一方、2004年のオーストリアにおける松前カップの参加国は次のとおりである。

オーストリア、クロアチア、チェコ、フィンランド、ドイツ、イギリス、ハンガリー、イタリア、スロベニア、ニュージーランド、ポーランド、ポルトガル、セルビア・モンテネグロ、スロベキア、スウェーデン、スイス、日本

文献

- 1) 橋本敏明・中西英敏・光本健次・恩田哲也（1998）柔道国際講習会の実施状況についての調査報告。東海大学紀要体育学部。第28号、
- 2) 同上、p 53.